

幼児教育におけるオペレッタの位置づけと その歴史的変遷

岩井真澄
(東京家政大学大学院)

1. はじめに

保育現場でおこなわれる表現活動のひとつにオペレッタがある。オペレッタとは、「歌、台詞、踊りからなる音楽喜劇。イタリア語で〈小歌劇〉という意味。」⁽¹⁾とあるが、幼児教育におけるオペレッタは、作者や保育現場により様々であり、台詞はなく歌と踊りのみで進められていくものが存在することもあり、定義づけは難しい。また、「〈オペレッタ〉〈ミュージカル〉〈音楽劇〉」など厳密な区別なく使用されており、同じ呼び方でも内容が異なっていたり、違った呼び方でも同じ内容の活動であったり用語の使われ方が混乱している。⁽²⁾本研究では、オペレッタを〈幼児教育における音楽(歌)を伴った劇〉とし、作品のタイトルや掲載された雑誌記事に〈オペレッタ〉〈ミュージカル〉〈音楽劇〉など音楽を主とした作品であることが明言されているものを指すこととする。

筆者が勤務していた幼稚園でもオペレッタを取り入れており、子ども達は物語や音楽からイメージを膨らませ、それをのびのびと楽しんで表現していた。友だち同士互いの表現を認め合いながらひとつの作品を作り上げていく過程からは、表現力や創造力さらには自己肯定感や社会性を身に着けていく姿が見られた。

現在書店には、幼児のためのオペレッタに関する専門書が多く並び、オペレッタに教育的効果を期待する保育者が多いことがうかがえる。

2. 研究目的

本研究では日本の幼児教育の歴史において、オペレッタがどのような位置づけをされてきたのかを、昭和 20 年代末から相次いで創刊された保育雑誌を見ていくことで確認したい。保育雑誌はその時代の保育事情を敏感に捉え、現場の保育者に大きな影響を与えてきたものと思われる。その上、書籍と比べ読者との相互作用が高いという性質を持つため、その時代の保育者が何を求め、保育内容をどう理解していたのかを把握するのに適当であると考え。保育者にとっての指標とも言うべく保育雑誌においてオペレッタがどのように扱われてきたか、その歴史的変遷をたどることは、オペレッタの教育的価値を今一度見直し、今後に役立てる手掛かりとなるのではないかと考える。

3. 研究方法

①『保育カリキュラム』(後に『保育とカリキュラム』)ひかりのくに

②『幼児と保育』小学館

③『保育の手帖』(後に『保育専科』)フレーベル館

上記の保育雑誌を本研究の調査対象とする。各誌の創刊号から、1999(平成 11)年までのオペレッタに関する記事を抽出することで、オペレッタが保育界で注目されるようになった時期を明らかにするとともに、当時の保育界でオペレッタがどのように扱われ、教育情勢などによりそれがどのように変化していったのかを考察する。

4. 結果

①『月刊保育カリキュラム』ひかりのくに
出版年 1952(昭和 27)年~1974(昭和 49)年
『月刊保育とカリキュラム』ひかりのくに
出版年 1974(昭和 49)年~継続刊行中

本誌ではじめてオペレッタに関する記事が掲載されたのは、1971(昭和 46)年 3 月号である。「研究特集劇的な活動(オペレッタ)実践記録」との見出しで、勝山愛知香ヶ丘幼稚園 5 歳児のオペレッタの取り組みを実践記録として載せている。題材は藤田妙子の『ヤギとトロール』(原作北欧民話)で実践記録の執筆者は高田陽子である。それを受けて小林美実、宮内孝両氏が問題点の検討、理論づけをおこなっている。その後は 1987(昭和 62)年 4 月号に、「今すぐ役立つ保育資料 やさしいオペレッタ A・B・C」という見出しで、簡単なオペレッタの紹介を載せている。1 年間毎月(計 12 回)連載し、1988 年 3 月をもって終了している。オペレッタと言えども、内容は劇的要素よりも手遊びや伝承遊びにストーリーを持たせた形のものや、音楽に合わせて身体を動かすリトミック的なものなど、日常の保育に音楽を足すことで子どもの遊びを盛り上げるようなスタイルのものだった。曲も各回 1 曲のみの掲載である。

その後は、1992(平成 4)年に鈴木みゆきによる「誕生会・発表会のうたとオペレッタ」、1995(平成 7)年に阿部直美による「発表会の劇遊び・ミュージカル」が別冊の特集号として出版され、1999(平成 11)年には通常号で「オペレッタであそぼう『めんどりのケーキ』(佐倉智子作)」がおざわたつゆきによって楽譜、構成、衣装とともに紹介されている。オペレッタに関する記事は創刊から 39 年の間に計 18 回である。

②『幼児と保育』小学館

出版年 1955(昭和 30)年~2006(平成 18)年

本誌ではじめてオペレッタに関する記事が掲載されたのは、1959(昭和 34)年 2 月号「〈2 月の保育〉〈音楽〉

楽しいオペレッタの指導」執筆者は須藤久である。オペレッタそのものの掲載はなく、オペレッタ制作上の手順と注意が載せられている。須藤はオペレッタの筋書きの決定において考えられる方法を 2 つ挙げている。(1)子どもの実際の経験を生かして創作する。(2)子ども達が聞いて非常に喜んだお話し、感動した童話などをストーリーにする。なお、既成のオペレッタをとりあげる場合には子どもたちとの話し合いを十分に深め、教師の側の一方的な押しつけやつめこみにならないようにすることを注意点として挙げている。1962(昭和 37)年には「特集幼児のリズム遊び年齢別にみた新しいリズム遊び」という記事の中で「集団構成の喜びを味わう」という副題のもと、藤田妙子が執筆をしている。藤田自身が 4、5 歳児向けに作曲したオペレッタ作品『たろうのばけつ』(原作は渡辺桂子)が、12 曲の楽譜つきで掲載されている。その後本誌において藤田は度々オペレッタに関する記事を書いており、その数 29 回である。なお他の執筆者も含めたオペレッタに関する記事の合計数は創刊から 40 年の間に 39 回である。藤田がオペレッタに関する記事を寄稿しているのは 1962 年から 1979 年の 17 年間に集約されており、その間に他の執筆者の記事は 3 件のみであることから、この 17 年間においてはほぼ藤田の独壇場であったことがわかる。毎回藤田は自身のオリジナルのオペレッタを紹介し、楽譜、構成、衣装(かぶりもの)などを載せている。1985(昭和 60)年には、北村恵子による「子どもと作るオペレッタ」、1987(昭和 62)年阿部直美らによる「子どもと楽しむオペレッタ」、1991(平成 3)年鈴木みゆきによる「いつでも、どこでも、だれにでも、オペレッタ」、とその後にもオペレッタに関する記事は度々登場するが、それらは子どもとともに創作すること、話し合っ創り上げていくことが強調されている。

③『保育の手帖』フレーベル館

出版年 1956(昭和 31)年~1973(昭和 48)年

『保育専科』フレーベル館

出版年 1973(昭和 48)年~1985(昭和 60)年

本誌ではじめてオペレッタに関する記事が掲載されたのは、1955(昭和 30)年 7 月号で、「表現活動としての劇遊びのあり方」という記事の中で「劇遊び オペレッタ」という見出しで藤田妙子が執筆をしている。ここでは『小さなカモツレッシュャ』というタイトルの藤田が制作したオペレッタが紹介されている。子どもが汽車ごっこのときに歌っているメロディを用いて曲を書いたとあるように、子どもの遊びをもとに藤田がオペレッタ化したものとなっている。これも楽譜付きである。1986(昭和 61)年 1 月号では「子どもがつくる生活発表会①-B 落ちてきたお星さまの実践から」という見出しで坪田恵理子が藤田妙子のオペレッタの実践記録を載せており、子ども達の意見を取り入れながらの取り組みであったことが記されている。本誌でのオペレッタに関する記事の合計は創刊から 44 年の間に 8 回である。そのうち藤田の記事の掲載は 5 回で、その

時期は 1955 年から 1970 年の 15 年間であった。

3 誌の保育雑誌からオペレッタに関する記事を抽出した結果、最も掲載が多かった時期は 1960 年代~1970 年代であった。また、『幼児と保育』、『保育の手帖』においては全掲載数のうちの過半数が藤田妙子による記事であることがわかった。連載として取り上げられている最後の記事は『月刊保育とカリキュラム』のおざわたつゆきのオペレッタで 1989 年 3 月である。

5. 考察

保育雑誌で取り上げられてきたオペレッタは、大きく分けて次のふたつに分類することができる。①完成された“作品”としてのオペレッタ②子どもとともに創作するオペレッタである。保育雑誌で特に取り上げられることが多かった藤田のオペレッタは①にあたり、その掲載数は圧倒的に多く、その事実から藤田のオペレッタが当時の保育者から求められ、広く浸透していたことがわかる。

1947(昭和 22)年幼稚園は学校教育法により学校と規定され、1956(昭和 31)年には、文部省より幼稚園教育要領が発刊された。そこでは幼稚園教育の内容が領域という用語で扱われ 6 領域が示され、小学校教育との一貫性が重視されるようになった。その中で「小学校以上の学校における教育とは、その性格を大いに異にする」⁽³⁾との説明があるものの、ともすれば幼児教育が小学校の教科のように扱われかねなかったその時代に、それを払拭すべく幼児の総合的な活動としてオペレッタは保育界において注目されるようになったと考えられる。藤田も、自身のオペレッタをまとめた著書の中で「『幼稚園教育要領』では、〈音楽リズム〉その他便宜上 6 領域にわけてありますが、それらはたがいに混ざりあい、補いあっており、未分化のまま与えられることが望ましいのです。」⁽⁴⁾と綴っている。だが次第にオペレッタは、保育者が一方的に子どもに与えるもの、日常生活とは切り離されたものというイメージに変わっていき、保育雑誌においてオペレッタを完成された“作品”として紹介することが極端に減っていった。1985 年頃からオペレッタは②のような創作活動としての色を濃くしたものが増え、①のような完成されたオペレッタの紹介は、その数が減ったことで逆に特別なものであるかのように映し出されるようになった。1989 年以降オペレッタの連載がないことから、オペレッタが日常的におこなわれる活動として取り扱われなくなっていったことが言える。

6. 今後の課題

多数の作品を世に送り出した藤田をはじめ、先人が残したオペレッタ“作品”は、現代の幼児教育においても意味のある教育的価値が存在するのではないかと考える。幼稚園教育要領の改訂、子どもにとってよりよい保育の模索などから、当時作者がオペレッタに込めた教育的意味は見失われ、そのまま時代は過ぎてしまったのではなからうか。当時の作者は、単に子どもに一方的に与えるものとして制作したのではな

児童学児童教育学専攻 岩井真澄
日本乳幼児教育学会第 27 回大会 西南学院大学(福岡市)
H29.11.11~H29.11.12

く、作品そのものに意図を込めていたはずである。保育者がオペレッタをどのようにして取り扱い、保育の中の一環境として存在させることができるか、今一度検討することで、オペレッタの今日的意味を見直していきたい。

引用文献：(1)日本音楽教育学会編(2004)『日本音楽教育辞典』音楽之友社、(2)同上、(3)文部省(1956)『幼稚園教育要領』昭和31年度、(4)藤田妙子(1979)『子どものための11のオペレッタ』フレーベル館
参考文献：民秋言(2014)『幼稚園教育要領・保育所保育指針の変遷と幼保連携型認定こども園教育・保育要領の成立』萌文書林